

〈詩人〉と〈知性人〉の相克  
—萩原朔太郎「日本への回帰」と保田與重郎の初期批評との思想的交錯  
をめぐって—

井川 理

### 要旨

萩原朔太郎「日本への回帰 我が獨り歌へる歌」(1937)は、これまで、思想史研究の領域においては「近代化に対する反動の典型」として位置付けられる一方で、文学研究の領域においては萩原朔太郎の晩年期の思想を考察する上であまり重視されてこなかった。しかしながら、「日本への回帰」は、従来の研究において前提とされてきた「欧化と回帰」という単線的な図式に還元しえない要素を孕み、『氷島』(1934)以降詩を書かなくなった「詩人」の営為を検討する上で重要な指標となるテキストであると思われる。なぜなら、そこには「詩人」が主体となり詩論を展開する部分と、過去から現在への近代日本史を辿り、未来において「日本の世界的新文化を建設」しようとする「知性人」による文明批評的な部分とが混在した複雑な言説構造が看取されるからである。本稿では、これらの「詩人」と「知性人」の在り様を、同時期に萩原朔太郎が「詩人の文学」として共感を寄せた保田與重郎の初期批評を補助線として、それぞれ詳細に検討する。それらの作業を通じて、詩を書かなくなった「詩人」であり、文明批評的な散文を多く執筆した「知性人」でもあった晩年期の「萩原朔太郎」という主体の葛藤を考察したい。

**キーワード：**萩原朔太郎、日本への回帰、保田與重郎、イロニー、詩人、知性人

### 1. 本稿の課題

萩原朔太郎「日本への回帰 我が獨り歌へる歌」(以下「日本への回帰」と表記)は、『いのち』(1937年12月)に発表され、のちに単行本『日本への回帰』(1938年3月)の巻頭に収録された<sup>1)</sup>。このテキストは、松村寛之が整理しているように思想史研究の領域では1930年代から40年代の日本における「近代化に対する反動の典型」として位置付けられる一方で、近代文学研究の領域では萩原朔太郎の晩年期の思想を考察する上であまり重要視されてこなかったテキストである<sup>2)</sup>。とりわけ萩原朔太郎研究においては、例えば「朔太郎は決して日本への回帰を行いはしなかった」<sup>3)</sup>といった論述に示されるように、詩人・萩原朔太郎が「日本回帰」<sup>4)</sup>を行ったのか否かという問いへと矮小化され、し

ばしば否認の対象とさえなってきたといえる。

しかし、「日本への回帰」はそのような単一の主体による「欧化と回帰」<sup>5</sup>という単線的な図式では捉えきれない側面を有するテキストであるように思われる。それは例えば、菅野昭正が「日本への回帰」には「…」詩の問題に照準を向けた側面もたしかに含まれていた。そこでは、萩原朔太郎は、文明のなかの詩を論じようとしていたのである」と示唆するように<sup>6</sup>、詩論的な側面と文明批評的な側面とが絡まり合う複雑な言説構造が看取されるからである。さらにそこでは、同時代において詩的なものを求めて「漂泊」する「詩人」と、過去から現在への近代日本史を辿り、未来において「日本の世界的新文化を建設しよう」と意志する「知性人」という二重の主体が混在する入れ子構造になっているといえよう。この「知性人」とは、「知識階級」や「インテリ」と相同的に使用される語彙であるが、例えば朔太郎が「インテリ以前の日本詩壇」（1936年5月）において、「すべて芸術家と文学者は、世間人との比較に於て、知識階級を代表するところの人種であるが、さらにまた彼等の中で、詩人がそのインテリの最尖端を代表して居る」<sup>7</sup>と述べるように、「詩人」を包含する存在として捉えられていたといえる。しかしながら、「日本への回帰」というテキストにおける「詩人」と「知性人」とは、そのように統合された単独の主体としてではなく、「西洋／日本」をめぐる認識において矛盾を孕みつつ拮抗する、差異化された主体として表出しているように思われるのである。

そこで、本稿では、テキストにおける「詩人」と「知性人」を重複しながらも拮抗する二重の主体として捉え、それぞれの在り様を分析していくことを目的とする。またその際に、朔太郎が「日本への回帰」執筆前後の時期に「詩人の文学」<sup>8</sup>として共感を寄せた保田與重郎の初期批評を議論の補助線として参照する。それは、『氷島』（1934年6月）以降実質的に詩作を行なわなかった「詩人」であり、文明批評的な散文を多く執筆した「知性人」でもあった萩原朔太郎の思索を考察するにあたり、保田の批評テキストに「詩的精神」<sup>9</sup>を見出したことは重要な指標となるように思われるからである。これらの作業を通じて、これまで「欧化と回帰」という近代日本の知識人の思想的転回を象徴するテキストとして読まれてきた「日本への回帰」の再検討を試みたい。

## 2. 保田與重郎の初期批評

従来の萩原朔太郎研究では、1930年代後半の「日本回帰」とともに、保田與重郎を中心とした日本浪漫派との親交についても否認される傾向にあり<sup>10</sup>、朔太郎が保田らに示した共感に対して内在的な検討が行われてきたとは言い難い。それは当然ながら、保田が敗戦後に日本の戦争遂行に寄与したイデオログとして激しい批判的となったことに起因している。しかしながら、朔太郎の保田への共感は、単純に日本的伝統への「回帰」という位相においてのみ捉えられるべきなのだろうか。前述したように、朔太郎は保田の批評の日本主義的側面ではなく、その「詩的精神」を称賛しているのであり、

その評価の内実についてはまた別の側面から検討が加えられる必要があると思われる。

日本浪漫派の胎動期である 1930 年代は、政党政治の腐敗、恐慌に端を発する貧困問題、都市と農村の格差の拡大、マルクス主義弾圧などの思想統制の強化、あるいは満州事変から日中戦争へと至る国内外の情勢不安を背景として、進歩的であったはずの近代化に対して疑問が付された時期であり、また、同時期の文壇ではプロレタリア文学が衰退を余儀なくされていくなかで、転向文学や不安の文学・思想が流行していた時期でもあった。「僕らは青年の時代にそれらの不安な時代の思潮で素地から訓練された」<sup>11</sup>と述べるように、保田は自らの世代がア priori にそのような「不安」を強いられていたという自覚のもとに自身の文学的立場を模索していったのである。本節では、雑誌『日本浪漫派』（1935 年 3 月 - 1938 年 8 月）の創刊前後の時期の保田のテキストを主な対象とし、朔太郎がいかなる点において共感を示したのかという問いを念頭に置きつつ、その批評実践を概観したい。

まず、プロレタリア文学を含めた近代日本のリアリズム文学を批判し、日本におけるロマン派としての自らの文学的立場を述べた「文学の曖昧さ」（1935 年 10 月）というテキストを検討したい。そこで注目されるのは保田の「伝統」に対する態度である。

今日僕らのもつ文学は非常に曖昧なものを含んでゐるのである。そのゆゑはたとへば僕らは明確な国文学伝統の一つさへもつてゐない。僕らの大部の青年のアルバムにあるものは、日本文学の図ではなく、むしろかなしい西洋の図であらう。西洋の図なら僕だつてもつてゐるのだ。<sup>12</sup>

保田は自らを「かなしい西洋の図」しか持たず「明確な国文学伝統」から断絶された世代として自己規定を行う。このことは、戦中期の保田の思想的展開を想起するとき奇異にうつる<sup>13</sup>。なぜなら、敗戦後に日本の古典や伝統を称揚し皇国賛美のイデオログとして断罪されることになる保田が、少なくともその批評活動の初期においては日本という共同体を成立させる伝統から最も隔てられた世代であるという自己認識を有していたことになるからである。そして、このような認識に貫かれていたがゆえに、保田は自身の芸術に対する態度が「人工的」たらざるをえないものになるという。そこに保田の批評のキー概念である「イロニー」が出来るのである。

芸術する人間の態度といふものは、即ち芸術に対する関係は自然的であるか又は人工的である。それが近來の自覚の後には概して人工的であらねばならなかつた。今日の態度に僕は瞭然として後者をみる。何かの形で僕らは過去を解釈し過去を回想してゐるのだ。それははつきりした形でいへば、ギリシヤ・ローマであり、推古・天平である。それらを解し想うてゐるに他ならない。しかもさういふ表情には今日

の場合きつとデカデンツを意識する可能性だけしかない。

僕らの時代はイロニーの時代であり、あらゆる偉大なもの光栄のものが己の故郷としてのイロニーを考へざるを得ない日である。その想起を強ひられてある日である。さうして僕らはここでも発露として自然的なものを憧憬しつつ、じつに態度として人工的なものしかとり得ない。ただ僕らの新時代はこの人工的態度の自覚と、ひいてその強行を意識させられるといふべきであらう。<sup>14</sup>

ここに述べられるのは、芸術の「偉大」さや「光栄」さを「自然的なもの」としてではなく、あくまで「人工的態度」によって解釈された主観的なものとしてしか感受しえないことの認識と、それを「自ら意識して嗤」<sup>15</sup>う自意識を織り込まずにはいられないことを「強ひられてある」という時代的な意識であろう。保田のプロレタリア文学を含めた日本のリアリズム文学への批判の要点はここにあると考えられる。同論考において「真実な表現としての写実が、一般に嘘として今日僕を圧迫する。我国のリアリズムはかういふ嘘を全然顧慮しなかつた」<sup>16</sup>とも述べられるように、保田にとってリアリズム文学において再現された「客観的現実」はあくまで「写実」という手法による表象でしかなく、「嘘」としてしか享受しえないものであったのである。

また、芸術に対する態度として「人工的」でしかありえないことを自覚しながら、例えば日本の古典を自らの「新しい血統の文学」<sup>17</sup>として語るとき、それは伝統や血統と自己との連続性を疑うことなく、それらを手放して称揚するような言説とは本質的に異なるものとなるだろう。なぜなら、そこで召喚される伝統や血統とは、「自然的なもの」として外在しているのではなく、つねに自らの主観によって解釈された「人工」のものでしかありえないという認識に充たされたものになるからである。保田の「イロニー」概念の意味を確定することは困難だが、少なくとも上記のテキストの文脈においては、ある歴史的な対象の「偉大」さや「光栄」さを享受しても、客観的な真実や現実への到達不可能性の認識ゆえに、その伝統からの断絶という現時の「デカデンツ」が意識され、自らの主観性を「嗤」う自意識がつねにつきまってしまう事態を指すと考えることができる<sup>18</sup>。それゆえに、例えば「文明開化の論理の終焉」（1939年1月）において保田が「マルクス主義文芸」の後に現れた「ある種の日本主義文芸」に対して、「マルクス主義文芸が知性の保身術であつた如く、今日は国策に便乗することによつて多くの保身術が敢行されてある」<sup>19</sup>と批判していることも単なる詭弁として看過しえないものとなる。なぜなら、保田の「人工」や「イロニー」といった概念は、そのような「自然」に現在の自己と接続できるような思想や伝統、血統といったものに対する無批判な信仰そのものを問いに付す態度としてあったといえるからである。

しかしながら、この保田の批評実践は、桶谷秀昭が「当時の公けの戦時国策イデオロギイを納得しない青年の心情に、一等自然に強く働きかける思想であつた」<sup>20</sup>と述べる

ように、その国策的なイデオロギーへの批評性ゆえに国家の戦争遂行に加担してしまったともいえる。その意味において、五味渕典嗣が、言語と主体との関係の理論的な考察から出発した保田の『日本浪漫派』前夜の批評実践が、同一の問題系を含有しながらも、日中戦争全面化以降の展開において「一人の兵として匿名の死を死なねばならなかった」人々に対して「みずからの〈死〉を叙事詩として仮構＝加工する手つきを教え」るものとして機能してしまったと論じていることは示唆に富むものだろう<sup>21</sup>。

ただし、このような保田の批評実践は、初発の段階においては、近代日本にとって自己／他者であった(日本的)西洋近代を批判することを企図したものであったといえる。しかしながら、「かなしい西洋の囚」しか持たないにもかかわらず、西洋近代に依って立つことを否定する態度は、当然ながら自己否定にもつながる<sup>22</sup>。それは以下に引用するように『日本浪漫派』以前の「反動期の精神」(1934年4月)にすでに示されていた。

冷淡に僕らの時代の精神を考へてみよ。あらゆる情勢の不快の圧迫と、生活の不安の中に於て、自己を追及すればする程、つひに空虚な自己を見出すであらう。自己がどこにも何によつても安心して立つところがない。自由精神が許された何の保証もない。それは生活的にも僕らはどんな見透しも確信ももたない。そしてそのことは内的にもいへる。結局僕らは絶大な無にたどりつくやうである。いはゆる無からの創造を形而上学的に考へることはいらぬのである。僕らは生活の反省と自己追求に於て無にたどりつく。<sup>23</sup>

どのような対象に対しても「主観的」で「人工的」たらざるをえないとすれば、「現実」との関係から自己を定位することができず、「自己を追求すればする程」「どこにも何によつても安心して立つところがない」「空虚な自己を見出」さざるをえない。しかし、保田はこのような「空虚な自己」に留まり続けることを自らの批評の方法へと転用していく。それゆえに、「文明開化史の最終段階」である「マルクス主義文芸」の「次の曙への夜の橋」という日本浪漫派の自己規定は<sup>24</sup>、「次の曙」の内容を示さないまま留め置かれることになるのである。当然ながらこのような態度は、Fr・シュレーゲルの「永遠にただ生成し続けていて、決して完成することがないというのが、ロマン主義文学に固有の性質なのである」<sup>25</sup>という定義に依拠したものであるが、保田は抛り所を喪失した「空虚」や「絶大な無」へと自己を留保し続けることを、西洋近代を批判しつつ主観によるロマン的自由を確保する戦略へと転化させたのである。それはまた他者性の徹底的な欠落と、無際限の自己の肥大を招来するものでもあったといえるだろう。

こうした保田の初期批評の実践にみられる諸特徴が、同時代の高見順や太宰治らによる「自意識過剰」と評される文学実践と同型性を有していたことはすでに先行論で指摘されているが<sup>26</sup>、萩原朔太郎の詩集『氷島』もまた同様の視座から捉えることができる

のではないだろうか。なぜなら『氷島』は、詩集全体を「著者の実生活の記録」<sup>27</sup>と位置付ける「自序」を冒頭に掲げ、収録詩篇の素材となった「著者」自身の伝記的事実を注釈した「詩篇小解」を末尾に配置することで、「萩原朔太郎」という固有名と結び付けられた「著者」の私的な問題系へと詩テキストの意味を限定する言説的志向性を有していたからである。この『氷島』のメタレヴェルからの言及によって立ち上げられる「漂泊者」としての「我」の表象<sup>28</sup>には、上記の同時代的な文学実践と共振する側面を看取することができるだろう。

次節では、これまで概観してきた保田の初期批評の問題意識を参照項として、「日本への回帰」における「詩人」の様態について検討していきたい。

### 3. 「日本への回帰」における〈詩人〉

萩原朔太郎は『詩の原理』（1928年12月）において、詩的なるものとは「主観」によって捉えられる「現在<sup>サイン</sup>しないものへの憧憬」のことであり、他方で、いま・ここに「現在<sup>サイン</sup>してあるもの」は詩情を喚起しない散文的なものであると定義している<sup>29</sup>。この定義からすれば、朔太郎が保田を「詩のエスプリから出発したところの文学者」<sup>30</sup>と評して讃辞を送ったことも容易に理解できるだろう。前節で述べた保田の「人工的態度」とは、現前する何物をも主観による構築物として捉える態度であり、眼前に「現在<sup>サイン</sup>するものとの隔たりを前提条件とする点で朔太郎の詩的なるものの定義と共通する。さらに、『月に吠える』（1917年2月）から『青猫』（1923年1月）に至るまで無限のイメージーションを喚起する憧憬の対象としてあった西洋近代への幻滅と、そのことに起因した拠り所のない「漂泊者」という主体の在り様も重なり合うものであったのだから、朔太郎の保田への共感は必然のものであったといえる。

ただし、ここで注意しなければならないのは、「日本への回帰」において述べられる幻滅が、「西洋の図」それ自体への幻滅ではなかったという点である。

あの五層六層の大玻璃宮に不夜城の灯が燈る「西洋の図」は、かつての遠い僕等にとつて、鹿鳴館を出入する馬車の轆蹄と共に、青春の詩を歌はせた文明開化の幻燈だった。だが今では、その幻燈に見た夢の市街が、現実の東京に出現され、僕等はそのネオンサインの中を彷徨してある。そしてしかも、かつてあつた昔の日より、少しも楽しいとは思はないのだ。

[…]

かつて「西洋の図」を心に書き、海の向うに蜃気楼のユートピアを夢みて居た時、僕等の胸は希望に充ち、青春の熱意に充ち溢れて居た。だがその蜃気楼が幻滅した今、僕等の住むべき真の家郷は、世界の隅々を探し廻つて、結局やはり祖国の日本より外にはない。しかもその家郷には幻滅した西洋の図が、その拙劣な模写の形で

汽車を走らし、電車を走らし、至る所に俗悪なビルヂングを建立して居るのである。  
(485 - 487 頁)

ここに述べられるように、「西洋の図」への幻滅とは、なによりもそれが「拙劣な模写の形」で眼前に「現在してゐる」こと、そしてそれにより「西洋の図」がもはや詩情を喚起するものではなくなってしまうことに対する幻滅であった。そして、そこに見出される「真の家郷」としての「祖国の日本」とは、それが「現在しないもの」である限りにおいて、「僕等の詩人」によって希求されるものとなる。すなわち、「西洋の図」に触発された「青春の詩」に代わって、いま・ここに実在しないがゆえに「祖国の日本」は「漂泊者の歌」の詩題として選択されていくのである。ここには、「現在しないもの」としての「日本」をロマン的な対象として仮構することで、そこに暫定的に詩的なるものを見出そうとする「詩人」の営為を看取することができるだろう。しかしながら、それが結局のところ「よるべなき魂の悲しい漂泊者の歌を意味」してしまうのは、「日本」を詩的なものとして留め置くために、それを永遠に到達不可能な対象として措定せざるをえないからなのである<sup>31</sup>。また、保田與重郎の「イロニーとしての日本」<sup>32</sup>という語が、井口時男が述べるように「アジアでありながら西洋に侵された国、侵されながら無垢を保存する国」という、「現実」に拘束された「日本」を相対化し、主観的に「日本」を空想する自由を確保するための戦略を示す概念としてあったとするならば<sup>33</sup>、そこには「日本への回帰」における「詩人」に共通する態度を指摘できるだろう。これらの点に、同時代日本における「詩的」なるものの不在と、それを希求する「詩人」の在り様を論じた「日本への回帰」というテキストの一端を垣間見ることができる。

しかし、「我れは何物をも喪失せず／また一切を失ひ尽せり」という「乃木坂倶楽部」(1931年3月)の詩語の引用の在り様を考え併せるとき、逆説的にも、そのような「詩人」の営為とは異なる側面が表出してくるように思われる<sup>34</sup>。先の引用箇所には以下のような文が続く。

僕等は一切のものを喪失した。しかしながらまた僕等が伝統の日本人で、まさしく僕等の血管中に、祖先二千余年の歴史が脈搏してゐるといふほど、疑ひのない事実はないのだ。そしてまたその限りに、僕等は何物をも喪失しては居ないのである。

我れは何物をも喪失せず  
また一切を失ひ尽せり

と僕はかつて或る抒情詩の中で歌つた。まことに今日、文化の崩壊した虚無の中から、僕等の詩人が歌ふべき一つの歌は、かかる二律反則によつて節奏された、ニヒ

ルな漂泊者の歌でしかない。AはAに非ず。Aは非Aに非ず、という弁証論の公式は、今日の日本に於て、まさしく詩人の生活する情緒の中に、韻律のリリズムとして生きているのだ。(487 - 488 頁)

「文化の崩壊した虚無の中」において「詩人」がうたう「二律反則によって節奏された、ニヒルの漂泊者の歌」であるという引用詩語に付された注釈からは、一見『氷島』の主題である「漂泊者」の「虚無」的な状況と同様の認識が述べられているかのようにみえる。しかしながら、その意味作用は引用元のコンテキストからは決定的な変容を被っているように思われるのである。以下に「乃木坂倶楽部」の前半部分を引用する。

十二月また来れり。／なんぞこの冬の寒きや。／去年はアパートの五階に住み／荒漠たる洋室の中／壁に寝台を寄せてさびしく眠れり。／わが思惟するものは何ぞや／すでに人生の虚妄に疲れて／今も尚家畜の如くに飢えたるかな。／我れは何物をも喪失せず／また一切を失ひ尽せり。／いかなれば追はるる如く／歳暮の忙しき街を憂ひ迷ひて／昼もなほ酒場の椅子に酔わむとするぞ。／虚空を翔け行く鳥の如く／情緒もまた久しき過去に消え去るべし。<sup>35</sup>

「乃木坂倶楽部」では、アパートの「荒漠たる洋室」と「酒場」、および、その間にある「街」を彷徨する単身者の「我れ」の絶望的な日常を嘆くという文脈に詩語が位置しているため、後半部の「一切を失ひ尽せり」という「喪失」それ自体が強調されているといえる。それに対して、「日本への回帰」では、「一切のものを喪失した」にもかかわらず「祖国の日本」の「祖先二千余年の歴史」を想起する限りにおいては「何物をも喪失しては居ない」ことが強調される文脈に詩語が引用されることで、その力点は前半部の「何物をも喪失せず」の方へとずらされているのである。さらに詩語の引用の後には、「乃木坂倶楽部」において「久しき過去」に消え去るはずであった「情緒」が「詩人の生活」に復元されてもいる。すなわち、「我れは何物をも喪失せず／また一切を失ひ尽せり」という「乃木坂倶楽部」の詩語は、『氷島』における「著者」自身の私的な問題系の範疇から、「日本への回帰」における 1930 年代後半の「日本」という国家的な問題系についての叙述へと再配置されるプロセスにおいて、すべてを喪失した「虚無」それ自体を表象するものではなく、「文化の崩壊した虚無の中から」(傍点引用者) 抜け出る可能性を示唆するものへと変容を被っているのである<sup>36</sup>。

またこのようなコンテキストの変遷を表徴するものとして、二つのテキストの時間構造の差異も注目される。「乃木坂倶楽部」では、不意に「久しき過去」という直線的かつ不可逆的な時間性が導入されるものの、「十二月また来たれり」と詩全体を統御する詩語が繰り返されることにより、絶望的な日常が無限に繰り返されるような円環的な時間構



造が基調となっているといえる<sup>37</sup>。それに対して「日本への回帰」は、「回帰」という円環的な時間性を喚起する語が表題に付されながらも、全体としては明治期の文明開化から現在を経て未来を遠望するという直線的な時間構造が支配的になっているのである。これらの「乃木坂倶楽部」から「日本への回帰」へと至る推移にみられる諸特徴は、朔太郎と保田との差異もまた前景化させるものである。前節で引用した保田の「反動期の精神」に言明されていたように、「空虚な自己」に留まることは一方でロマン的な自由への契機ではあるにしても、そこにはつねに現在の「絶大な無」へと帰着してしまうという絶望が滲んでいた。保田の初期批評には、このように古典や伝統といった過去への「回帰」だけでなく、過去から現在へと絶えず送り返される「回帰」の運動もまた見出されるのである。「乃木坂倶楽部」にはこの保田の初期批評と同様の認識が看取されるものの、「日本への回帰」において、直線的な時間構造が基調となり、現実の「虚無」から抜け出る可能性が示唆される点においてその差異が露呈するのである。ここに、「日本への回帰」において「詩人」と立場を異にする「知性人」という主体が出来してくる契機を見出すことができる。

次節ではこのような朔太郎と保田との立場の差異を起点として、「日本への回帰」における「知性人」の在り様を検討していきたい。

#### 4. 「日本への回帰」における〈知性人〉

朔太郎と保田との差異を検討するにあたり、まず「英雄と詩人を讀みて 保田與重郎君と日本浪漫派」（1937年1月）というテキストを引用したい。

保田與重郎君は、かかる日本の世紀末を、デカダンスの断崖に立つて歌ふところの、一人の最も勇ましい浪漫派の詩人である。すべての超人と英雄とは、没落によつて誕生する。このニイチェの弁証論を知らないものは保田與重郎君の浪漫哲学——デカダンスであることによつて、人は明日の英雄たり得るといふこと。——を理解し得ない。[……] 日本浪漫派の文学運動は、この最初の「新しき弁証論」を、日本の文壇に啓発して、すべての絶望した青年たちに、明日の希望と夢とを與へ、併せて文学に於ける一つの新道を開拓した。<sup>38</sup>

この引用箇所は、朔太郎が最も直接的に保田への讃辞を述べたものである。しかしながら、この保田に対する「最も勇ましい浪漫派の詩人」という評言は適切なものであるのだろうか。むしろ保田は「絶望した青年たちに、明日の希望と夢とを與へ」るような健全な思想をこそ批判したのではなかったのだろうか。保田が述べるのは、「デカダンス」の先に「明日の英雄たり得る」のではなく、「明日の英雄」を夢想し憧憬しつつも、つねに現在の「絶大な無」へと「回帰」していくこと、そのような「今日」に留まらざるを

えないような心性だろう。そこに「ヒューマンイズムの根拠」や「モラルの出発する基礎」を見出し「明日の希望と夢とを與へ」るものとする朔太郎の理解は<sup>39</sup>、桶谷秀昭が述べるように「年来のじぶんの主張や感情にひきつけ」て行われた誤読といわざるをえないのではないだろうか<sup>40</sup>。

おそらくこのような誤読は、朔太郎と保田の思考方法の差異に起因していると考えられる。朔太郎は「自分の思想様式は弁証論的であり、反正二面の対立上に、<sup>ソルレン</sup>当為としての止揚性をイデーしてある」<sup>41</sup>と自身で述べるように、「弁証論」的な志向を有していたといえる。他方で保田は「たゞ軽快にものごとを正反合の形で整合できると思つてゐる根性が、当然にくづれるところ、或はあらはにくづれたところで僕らはものを云ふだけである」<sup>42</sup>と自らの立場を言明するよう、「反・弁証法」<sup>43</sup>的な志向を有していたのである。おそらくこのような基本的な思考方法の差異ゆえに、保田は朔太郎の「詩」そのものに対しては、「萩原氏のかなしい詩のきびしさを情感に於てとらへるものは僕らの世代である」とそこに表象される「喪失の感情」への素直な共感を示すのに対し<sup>44</sup>、詩作を行わなくなった朔太郎に対しては極めてアンビヴァレントな態度を示すのである。保田は、朔太郎のこれまでの偉業を称賛するとともに「歌ふよりも語らねばならぬ」なくなった「詩人」の苦悩を論じた「現代と萩原朔太郎」（1936年9月）において、自らの世代との差異を強調しつつ以下のように述べる。

本来の意味に於ての詩人として現代に残された彼は、現代のイロニーを代表することさへこのときに強ひられてゐる。イロニーが我々の意味で、一切偉大なものの故郷であるとき、それは現代に於ける唯一の新詩人萩原朔太郎が表象する。思ふにこのイロニーが、イロニー的弁証法とあり、すすんで我国の詩界で弁証法となると、現代の詩は無氣力化されたのである。我々の周囲ではアウフヘーベンといふ言葉はこのやうにして日本語化されたと見える。<sup>45</sup>

引用箇所を表面的に読み取れば、保田は「弁証法」的な志向（合理精神・散文精神）が「詩界」に及んだがゆえに「詩」が不在となってしまっている現状を嘆いているようにみえる。ただし、ここに前述した「弁証論的」な「思想様式」に貫かれた朔太郎の散文テキストをつき合わせる時、保田の意図は別にして、その記述は朔太郎のテキストに対する批評性を帯びてしまうのではないだろうか。「無氣力化」に「アウフヘーベン」というルビを付す「イロニー」的表現は、弁証法的な思考法そのものを「無氣力化」することに向けられるとともに、「歌ふよりも語ることしかなくなってしまった朔太郎の「無氣力化」に対する違和の表明ともなってしまうのである。

このような「歌ふよりも語らねばならぬ」なくなった「詩人」は「詩人」のままではいられないだろう。「日本への回帰」において、「虚無」に留まり続けようとする「詩人」

とは差異化された「知性人」とは、このような位相において表出してくる主体であるといえる。その二重の主体の齟齬は、以下に引用するように、テキストの結末部分に明瞭に示される。

西洋的なる知性は、遂にこの国において敗北せねばならないだらうか。遂にその最後の日に、僕等は「虚無」と衝突せねばならないだらうか。否々。僕等はあへてそのニヒルを蹂躪しよう。むしろ西洋的なる知性の故に、僕等は新日本を創設することの使命を感じず。明治の若い詩人群や、明治のロマンチックな政治家たちが、銀座煉瓦街の新東京を徘徊しながら、青白い瓦斯燈の下に夢みたことは、実にただ一つのイデー——<sup>インテリジェンス</sup>西洋的知性の習得——といふことではなかつたらうか。なぜならそれこそ、あらゆる文明開化のエスプリであり、新日本の世界的新興を意味するところの、新しき美と生命との母音であるから。[…] 今や再度我々は、西洋からの知性によつて、日本の失はれた青春を回復し、古の大唐に代るべき、日本の世界的新文化を建設しようと意志してゐるのだ。

現実は無である。今の日本には何物もない。一切の文化は喪失されてる。だが僕等の知性人は、かかる虚妄の中に抗争しながら未来の建設に向かつて這ひあがつてくる。僕等は絶対者の意志である。悩みつつ、嘆きつつ、悲しみつつ、そして尚、最も絶望的に失望しながら、しかも尚前進への意志を捨てないのだ。

[…]

日本的なものへの回帰！それは僕等の詩人にとつて、よるべなき魂の悲しい漂泊者の歌を意味するのだ。(488 - 489 頁)

引用部にあるように、「知性人」による「日本の世界的新文化」の「未来の建設」への宣言の後に、「詩人」の「日本的なものへの回帰！」という絶叫が布置されることは、齟齬をきたすものであろう。なぜなら、過去から現在に至り未来へと「前進」する不可逆的で直線的な時間性を前提とした記述のうちに、不意に「回帰」という過去を省みる円環的な時間性が導入されることになるからである。前節で述べた時間構造の差異は、このように「日本への回帰」において、円環的時間を喚起する「詩人」と、直線的時間を支配する「知性人」の拮抗として表出する。この齟齬は、何よりも両者の「西洋／日本」をめぐる認識の差異に関わるものであると思われる。前述したように、「詩人」の主観によって見出される「日本」とは、詩情を喚起するものであり続けるために永遠に到達不可能な対象として措定されるものであった。他方で、「知性人」にとっての「日本」とは、詩題としてではなく、未来において自らの手で「建設」されるべき客観的・外在的な「文化」として定位されているのである。注目されるのは、その「日本」が「<sup>インテリジェンス</sup>西洋的知性」によって見出されるべきものとして捉えられている点である。ここで言及される

「<sup>インテリジェンス</sup>西洋的知性」とは、おそらく「拙劣な模写の形」で眼前に存在している「西洋の図」を象る諸制度や物質文明そのものではなく、それらを生み出そうと夢見るような心性のことなのだと考えられるが、ここにこそ、「知性人」と「詩人」との「西洋」をめぐる認識の差異が露顕しているといえる。なぜならそこで「知性人」は、現実において「漂泊者」たらざるをえない「詩人」とは異なり、「<sup>インテリジェンス</sup>虚無」と衝突することを回避し、「<sup>インテリジェンス</sup>西洋的知性」によって「失はれた青春」を回復しようとするからである。そして、そこで行われようとする「日本の世界的新文化」の「建設」の「意志」が文明開化期におけるインテリの心性に重ね合わせられることを鑑みれば、そこで述べられる「失はれた青春」の回復とは、「詩人」によって詩情を喚起しないものとして廃棄されたはずの「西洋」への憧憬を、「<sup>インテリジェンス</sup>西洋的知性」を保持しようとする「意志」によって再度召喚する振る舞いとして捉えられるのではないだろうか。ここに、保田與重郎らに共感を示し「文明開化の論理」を否定しながらも、初発の近代日本における「西洋」への憧憬を捨てきれない朔太郎自身の像を重ね合わせることも可能であろう。

ただし、ここで改めて問いたいのは、このようにテキストで肯定的に語られる「文明開化のエスプリ」であるところの「<sup>インテリジェンス</sup>西洋的知性」とは、それほど無垢なものであったのかということである。というのも、明治期から 1930 年代に至るまでの近代日本史は、「<sup>インテリジェンス</sup>西洋的知性」を有した「知性人」によって以下のように叙述されていたからである。

明治以来の日本は、殆ど超人的な努力を以て、死物狂ひに西欧文明を勉強した。[…] それはペルリの黒船に脅かされ、西欧の武器と科学によつて、危ふく白人から侵害されようとした日本人が、東洋の一孤島を守る為に、止むなく自衛上からしたことだつた。聡明にも日本人は、敵の武器を以て敵と戦ふ術を学んだ。(支那人や印度人は、その東洋的自尊心に禍され、夷狄を学ばなかつたことで侵略された。)[…]

しかしその西洋心酔の真最中にも、日本は治外法権を撤廃し、条約改正を行ひ、朝鮮の不義を糾弾し、あくまで民族的自主の国家意識を失はなかつた。即ち八雲が観察した如く、日本人の西洋崇拜熱は、西洋に隷属する為の努力でなくして、逆に西洋と対抗し、西洋と戦ふ為の努力であつた。そして遂に支那を破り、露西亜と戦ひ、今日事実上に於て世界列強の一位に伍した。(486 - 487 頁)

いうまでもなく、この「日本への回帰」というテキストが発表されたのは日中戦時下であり、日本はまごうことなき侵略の渦中であつた。それにもかかわらず、ここでは、日本がいち早く近代化してきたという「聡明」と対比させ「支那人や印度人」を劣位へと位置付けることで侵略の要因を被侵略国の側の不備へと転化し、また、「西洋」の「模倣」として行われた朝鮮に対する植民地政策を「民族的自主の国家意識」の発現であつ

たと誇示しているのである。そしてその叙述は、括弧内において、一文の主要な文意を占めることもないまま、あくまで「西洋」との関係によって総括される近代日本史の補足的な説明として処理されているにすぎないのである。このように、「西洋／日本」という二項対立的な認識に貫かれ、アジアへの侵略をあくまでも近代日本の「発展」の補完として回収する叙述を行う「知性」は、当然ながら無垢とは言い難いものであろう。むしろこのような「知性人」の（日本的）「西洋的知性」こそが、アジアへの侵略を正当化しつつその「盟主」として自己を定位し、西洋の帝国主義に対抗するという「大日本帝国」の論理を構築していくものにほかならなかったのである。

おそらく、「日本への回帰」で問われるべきは、これまでナショナリズムの観点から批判されてきたような日本への「回帰」の側面ではない<sup>46</sup>。そうではなく、むしろ近代日本史を上記のように総括し、「古の大唐に代るべき、日本の世界的新文化を建設しよう」と意志する「西洋的知性」の方だったということができただろう。朔太郎は「文學の革命」（1937年2月）の中で「インテリゲンチユアとは、人間の当為に対する批判者であり、文化の指導者であるところの人物、及びその階級者一般を指す言葉である」<sup>47</sup>と述べる。しかしながら、「日本への回帰」において、「日本の世界的新文化」の「未来の建設」を担うべき「文化の指導者」としての「知性人」は、それを「絶対者の意思」と同一化することによって遂行しようとしているのである。ここには、主体としての「知性人」の限界が示されると同時に、詩的ロマンの対象としての「日本」を仮構する営為を担保する「詩人」の主観性が放棄され、固有の「我」が消去されていく在り様を読み取ることができる。それは、先に述べたように、私的な心象風景を表象するために創出された詩語が散文へと組み込まれ、日本という国家の「未来の建設」の叙述に寄与するものへと変奏させられていく在り様とも重ねられるものであるだろう。このように、「日本への回帰」というテキストには、「絶対者」という大文字の他者へと同一化しようとする「知性人」に、「詩人」が屈服していく徴候が表象されていたのである。

## 5. 結論

本稿ではこれまで、萩原朔太郎の「日本への回帰」を、単独の主体による「欧化と回帰」という単線的な図式へと収斂させることなく読み直すことを目的とし、晩年の朔太郎が共感を寄せた保田與重郎の批評テキストを媒介させつつ、「詩人」と「知性人」という差異を孕んだ二重の主体が混在するテキストとして分析してきた。そこで見出されたのは、喪失された「日本」という「真の家郷」を詩的ロマンの対象として仮構しつつも「漂泊者」たらざるをえない「詩人」と、明治初年代の「日本」に自らを重ね合わせることによって再度「西洋」への憧憬を回復し、「世界的新文化」としての「日本」を「建設」しようとする「知性人」との在り様に示された、二重のロマン主義的な態度であったといえる。これらの二重化された主体の相克に表象されていたのは、通説のように西洋近

代への幻滅から日本への「回帰」に至るという単線的な軌跡ではなく、時局的な推移のなかで詩作を行わなくなっていった「詩人」でありながら、同時に詩壇の大家として多様な文明批評を執筆した「知性人」でもあった「萩原朔太郎」という主体の矛盾を孕んだ分裂的な像であった。そこには、「知性人」によって導かれる叙述の中に「詩人」の営為をいびつな形で混在させ、さらには副題に「我が獨り歌へるうた」と付すことでかろうじて「我」と「詩」を保持しようとする「詩人」としての「萩原朔太郎」の痕跡が刻み込まれていたといえるかもしれない。

## 註

- 1 本稿における萩原朔太郎のテキストの引用はすべて『萩原朔太郎全集』(筑摩書房 1986年 - 1989年)に依り、引用に際して旧字は新字に改め、特別な場合を除き適宜ルビを省略した。尚、「日本への回帰」の本文引用に際しては括弧内に頁数を記す。
- 2 松村寛之「イデーとしての日本 萩原朔太郎と近代」(『日本史研究』2008年5月)。
- 3 篠田一士「日本への回帰」(『伝統と文学』筑摩書房 1964年6月)、204頁。篠田は論考に「日本への回帰」という題を付しながらテキストとしての「日本への回帰」にはほとんど言及することなく、『氷島』に至るまでの詩作に「ヨーロッパ的志向」の「深化」を指摘し引用箇所結論を導き出している。また、同様に否認の傾向を有する先行論には以下のようなものがある。「萩原朔太郎における「日本回帰」の問題は、それほど大きな問題ではない。なぜなら、彼には帰るべき日本の明確なイメージはなかったからである」(大岡信『萩原朔太郎』筑摩書房 1994年4月、263頁)、「その詩的遍歴と全く無関係ではないまでも、年齢に伴う好みの変化にすぎず」「伝統主義とか、国粹主義とか大げさに騒ぎ立てるほどのものではない」(河村政敏「日本への回帰」(『国文学 解釈と鑑賞』1982年5月)、140 - 141頁)等。
- 4 河田和子によれば、「回帰」という用語は「戦後になって(特に昭和40年代以降)用いられたものであって、戦後的なニュアンス」が多分に含まれるものであるという(河田和子『戦時下の文学と〈日本的なもの〉 横光利一と保田與重郎』花書院 2009年3月、15頁)。ただし、本稿では戦後の言説の中で矮小化されてきたニュアンスを問題化するため、テキストの表記に従い「回帰」という用語を用いる。
- 5 西川長夫『日本回帰・再論 近代への問い、あるいはナショナルな表象をめぐる闘争』人文書院 2008年7月。
- 6 菅野昭正『詩学創造』集英社 1984年7月、255頁。またそのことは、初出誌では「時事随想」と題されたパートに掲載されていたテキストが、単行本『日本への回帰』に収録される際に「詩論と文明評論」というパートの巻頭へと再配置されたことに示されていたともいえる。
- 7 萩原朔太郎「インテリ以前の日本詩壇」(『文學界』1936年5月)、『全集 第10巻』、45頁。他にも「インテリとは何ぞや」(『文藝』1936年11月)などで同様の趣旨を述べている。
- 8 萩原朔太郎「詩人の文学」(初出誌未詳、『日本への回帰』(白水社 1938年3月)に収録)、『全

集 第10巻』、567頁。

- 9 同上、566頁。
- 10 このような「否認」の最も顕著な例として以下のものが挙げられる。「朔太郎は戦争の推進にも阻止にも何一つなすところがなかった。保田与重郎の思想さえ信じてはいなかっただろう。少し言い過ぎかもしれないが、孤独で、極端に内面的で、さびしくもあった昭和十年代の朔太郎は、保田与重郎にも、中野重治に対するのとそれほどちがわない、他には見出しがたい友情を感じたのだと想像される。」(飯島耕一『萩原朔太郎 2』みすず書房2004年1月、110 - 111頁)。
- 11 保田与重郎「今日の浪漫主義」(初出誌未詳、『英雄と詩人』(人文書院1936年11月)に収録)、『保田与重郎全集 第3巻』講談社1986年1月、32頁。
- 12 保田与重郎「文学の曖昧さ」(原題:「主題の積極性について(又は文学の曖昧さ)」、『日本浪漫派』1935年10月)、前掲『保田与重郎全集 第3巻』、53頁。
- 13 福田和也『日本の家郷』新潮社1993年2月、ケヴィン・M・ドーク [小林宣子訳]『日本浪漫派とナショナリズム』柏書房1999年4月、菅原潤『弁証法とイロニー 戦前の日本哲学』講談社2013年5月等を参照。また、大澤聡は日中戦全面化以降の保田の「日本回帰」的側面から遡及的にそれ以前のテキストを解釈することを戒め、伊東静雄とのテキスト的連関から『日本浪漫派』期の保田の批評テキストの再検討を行っている(大澤聡「詩人のイロニー―批評家のイロニー 伊東静雄と保田与重郎のメディア的相互投射」(『言語態』2008年7月))。
- 14 前掲「文学の曖昧さ」、61 - 62頁。ここで述べられる「人工」/「自然」といった概念を用いた保田の自己規定は、「青春の失墜」(『若草』1935年10月)等のテキストでも反復されている。
- 15 同上、66頁。
- 16 同上、59 - 60頁
- 17 同上、66頁。
- 18 松本輝夫は、保田の「イロニー」という概念が、日中戦争の進行を契機として、このような「作家の精神態度」を示すものから、「ただ混沌未形や、矛盾した概念をふたつながら同時に確保したものなり状態」という対象を示すものへと変容していった経緯を精緻に跡付けている(松本輝夫「保田与重郎覚書 イロニーとしての日本」(『早稲田文学』1971年12月))。
- 19 保田与重郎「文明開化の論理の終焉について」(『コギト』1939年1月)、『保田与重郎全集 第7巻』講談社1986年5月、14頁。
- 20 桶谷秀昭『保田与重郎』講談社1996年12月、222頁。
- 21 五味渕典嗣「死に行く者の自意識 保田与重郎初期批評論」(『岩波講座:文学 第10巻』岩波書店2003年10月)、173頁。
- 22 松村寛之は、このような保田の思想的営みを「西洋近代によって自己同一性としての「日本」

を定位することの矛盾が明らかとなるなかで出来た「葛藤する〈主体〉の表現」として詳細に論じている(松村寛之「保田與重郎 日本近代における〈主体〉をめぐって」『日本史研究』2012年3月)。

- 23 保田與重郎「反動期の精神」(『文學評論』1934年4月)、『保田與重郎全集 第2巻』講談社1985年12月、274 - 275頁。
- 24 前掲「文明開化の論理の終焉について」、14頁。
- 25 Fr・シュレーゲル [山本定祐 編訳]「断片 (アテネーウム断片)」(『ロマン派文学論』富山房1978年5月)、44頁。
- 26 高見順に関しては、「ナルプ解散、転向文学の氾濫という文学的地盤から芽生えた異母兄弟」として保田との共通性を見出す視座が平野謙によって提出され(近代文學社 編『現代日本文學辭典』河出書房1949年7月、242頁)、山下真史はそこに「自意識過剰」という文学的共通性を指摘している(山下真史「昭和十年代の〈近代文学〉」(『國語と國文学』1997年5月))。また、太宰と保田の共通性に関しては橋川文三『日本浪漫派批判序説』未来社1960年2月、井口時男『批評の誕生／批評の死』講談社2001年5月等がある。
- 27 萩原朔太郎『氷島』第一書房1934年6月、『全集 第2巻』、103 - 104頁。
- 28 『氷島』には、「自序」における「著者」や「詩篇小解」における「我れ」、そして複数の詩篇における「我れ」「われ」という主体や、「汝」という二人称の使用により潜在化させられる「我」など、多様な表記・表現によって複層化される「我」の表象が看取される。
- 29 「およそ詩的に感じられるすべてのものは、何等かの珍しいもの、異常のもの、心の平地に浪を呼び起こすところのものであつて、現在のありふれた環境に無いもの、即ち「<sup>ザイン</sup>現在してないもの」である。故に吾人はすべて外国に対して詩情を感じ、未知の事物にあこがれ、歴史の過去に詩を思ひ、そして現に環境してゐる自国や、よく知られているものや、歴史の現代に対して詩を感じない。すべて此等の「<sup>ザイン</sup>現在してゐるもの」は、その現実感の故にプロゼックである。」(萩原朔太郎『詩の原理』第一書房1928年12月、『全集 第6巻』、60 - 61頁)。
- 30 前掲「詩人の文学」、『全集 第10巻』、566頁。
- 31 このような主観的に構築される詩的ロマンの対象としての「日本」は、「漂泊者の文學」における「イデーとしての日本」という概念と相同的なものであったといえる(萩原朔太郎「漂泊者の文學」(『文藝』1937年7月)、『全集 第10巻』、337頁)。
- 32 保田與重郎「日本浪漫派について」(原題:「新浪漫主義について」、『國文學 解釈と鑑賞』1939年3月)、『保田與重郎全集 第6巻』講談社1986年4月、246頁。
- 33 前掲『批評の誕生／批評の死』、88頁。
- 34 本稿の「日本への回帰」における『氷島』詩語の引用についての分析は、拙稿「仮構と實在 「郷土望景詩」から『猫町』へ／『猫町』から「日本への回帰」へ」(『言語態研究の現在』七月堂2014年3月)での論述をもとにしたものである。



- 35 萩原朔太郎「乃木坂倶楽部」(原題:「乃木坂倶楽部アパートメント」、『詩・現実』1931年3月、のちに『氷島』(第一書房1934年6月)に収録)、『全集 第2巻』、110 - 111頁。
- 36 同時期の朔太郎テキストにおける「虚無の中からの創造」というモチーフは、「不安の文学」の流行によって知られるレフ・シェストフの著書『虚無よりの創造』(河上徹太郎訳、芝書店1934年7月)から影響を受けたものであったという(萩原朔太郎「詩人の嘆き」(『文學界』1935年6月)、『全集 第10巻』、89頁)。
- 37 このような「乃木坂倶楽部」を含めた『氷島』詩篇における円環性のモチーフについては高橋世織「『廻転』のイコングラフイー 『氷島』試論」(『感覚のモダン 朔太郎・潤一郎・賢治・乱歩』せりか書房2003年11月)を参照。
- 38 萩原朔太郎「英雄と詩人を讀みて 保田與重郎君と日本浪漫派」(『コギト』1937年1月)、『全集 第10巻』、371 - 372頁。
- 39 同上、374頁。
- 40 桶谷秀昭『近代の奈落 改訂版』国文社1984年1月、145 - 155頁。
- 41 萩原朔太郎「自序」(『詩人の使命』第一書房1937年3月)、『全集 第10巻』、5頁。
- 42 保田與重郎「後退する意識過剰 日本浪漫派について」(『コギト』1935年1月)、前掲『保田與重郎全集 第2巻』、439頁。
- 43 前掲『批評の誕生／批評の死』、86頁。
- 44 保田與重郎「『珈琲店酔月』から清水比舟氏の長歌に及ぶ」(『日本歌人』1935年9月)、前掲『保田與重郎全集 第7巻』、363頁。
- 45 保田與重郎「現代と萩原朔太郎」(『コギト』1936年9月)、『保田與重郎全集 第4巻』講談社1986年2月、87頁。
- 46 例えば西村英津子は、「日本への回帰」において朔太郎は「詩人としてまた個として「漂泊者」であり続けることの挫折を表明し」「(日本人)という仮構された共同体とともに「漂泊者」であることを」求め、「『昔』の「美しい日本」へと読者の意識を向かわせ」てしまったというナショナリズムの観点からの批判をおこなっている(西村英津子「詩人とナショナリズム 保田與重郎・萩原朔太郎・ドイツ・ロマン派詩人」(『近代文学研究』2008年4月、50 - 51頁)。
- 47 萩原朔太郎「文學の革命」(『文藝』1937年2月)、『全集第10巻』、315頁。

※本稿は東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻2014年度開講の「言語態演習Ⅱ」(エリス俊子先生)での口頭発表をもとに、大幅な加筆・修正を施したものである。また、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

